アリストテレス存在論の基礎構造について（承前）

岡野留次郎

一四

以上、我々は、自然學に於ける場所及び「今」に關するアポリアを檢到しながら、これをエウポリアとするには、運動體の概念に助を求める必要あることを論定した。卽ち、これ等兩概念は、運動體を、現實に運動するものとして、世界内に於て限定する自然存在論的原理であると見ることによつて、アポリアの解決を試みたのである。

扨て、自然學は、云ふ迄もなく、自然に關する論究であり、自然的存在が、一般に運動への内的衝動を持つものと考へられる限り、自然に關する一般的研究は、やがて運動に關する論究となり、運動の存在論的本質、並にその可能なる條件等が重要な研究對象となる。所で、運動は、云ふ迄もなく、運動體を豫想するのであるが、自然的存在たる運動體そのものの構成的原理としては、四つの原因が擧げられるが、結局は、形相と質料とが、重要な構成原理として認められる。[1] 所で、自然的存在は、運動の原理を自己の中に持ち、常に運動變化に於て在るものである。存在が自然的に（φύσει）[2] 在ると云ふことは、運動の原理（ἀρχὴ κινήσεως）を自己の中に持つと云ふことである。それ故に、自然とは運動或は變化の原理とも云はれ、[3] 詳しくは、「運動並に靜止の或種の原理乃至原因である。但し、それが第一義的に、それ自體に於て、そして附帶的にではなく、從屬するものに於てある場合。」（ἡ τῆς φύσεως ἀρχὴ τόπος καὶ αἰτία τοῦ κινεῖσθαι καὶ ἠρεμεῖν ἐν ᾧ ὑπάρχει πρώτως καθ' αὑτὸ καὶ μὴ κατὰ συμβεβηκός）[4] と云はれる。つまり、自然は運動變化の原理であると同時に、それが常に、所謂自然的存在の中に、偶然的・附帶的な仕方に

於てゞはなく、本質的・第一義的な仕方で内在して居なければならない。所で、自然的な存在は、一般に質料的原理と形相的原理によつて構成されると見られるから、自然は屢々自然的存在の質料を以て擬せられ、或はその形相を以て擬せられることがある。しかし、眞實には、自然は自然的存在の内在的運動原理として、單なる質料でもなく、形相でもなく、質料と形相の現實的綜合にあるとしなければならぬ。換言すれば、質料の形相的限定としての感性的個物が、自己自身の内面的・構成的原理に從つて、附帶的にではなく、本質的に、運動乃至變化する場合、それは自然的個物と呼ばれる。こゝには作るものと作られるものの對立はない。運動變化を惹起する原理が直に、運動變化の主體の中に在る。所が、かやうな自然的個物、卽ち自然的變化運動の主體としての自然的個物が、自然的世界に於て、現實的な運動變化の主體として存在するためには、一定の場所と時間點を必要とする。このことによつて、一つの運動體は、自然的世界内の一つの自然的存在として明確な定位をするばかりではなく、現實的に運動を可能にせられるのである。つまり運動とは、窮極に於て場所の轉換であり、それが同時に、時間的な限定を受けて居ると云ふことによつて、それが現實的に運動體として自然的に存在するのである。

アリストテレスが、運動を、單純に時間空間的無限連續量として把握したかつたと云ふことは後に詳しく述べたいと思ふ所であるが、それと同時に、運動と聯關せしめて、空間の代りに場所を論じ、時間論に於ける「今」と同じく、その限界的な性格を強調したことは、彼の自然存在論の特徴として銘記したければならぬ。場所は單に無限に連續する、到るところ同質的な連續量なのではない。包むものと包まれるものとを限界し、區別し、自然的存在の運動を可能にする原理なのである。時間も、單に同質的に無限に連續延長する量ではなく、過去と未來を限界し、區別し、兩者を分つと共に綜合する「今」が、運動體に卽することによつて、「前」「後」の性格を帶び、これ等が數へられることによつて成立するものであつて、恰も、限界としての場所が、運動體に卽することによつて、「上」或は「下」の性格を帶び、「共通の場所」が、かやうな「上」或は「下」の性格を帶びた、それぞれの自然的存在に「固有

な場所」の排列の秩序に於て成立つと趣を同じうする。時空が單に無限連續量と考へられる限りでは、以上のやうな意味を持つた場所とか「今」とかゞ考へられる餘地がない。かやうなものが考へられるには、その背後に運動體としての個物が考へられて居るからである。即ち、自然的運動の主體としての個體であつて、自然的世界に於て、一定の空間的限定即ち場所を占め、一定の時間點に於て現實的に存在する自然的存在である。この事は、しかし逆に考へるべきであつて、即ち、場所と時間とが、逆に、自然的個物の世界内の運動を可能にする條件、即ち自然存在論的原理なのである。尤もアリストテレスは、場所・時間の外に、無限・連續等の概念をも、運動の必要な前提概念と認め、場所・時間と並んで論究しては居るが、これは寧ろより高き秩序に屬する存在論的原理とすべきもので、時間・空間そのものが、アリストテレスに於て、本質的には無限連續的なものとして把握されてゐたことを示すものであるが、これ等の原理の自然存在論的秩序については、必ずしも明確に論定されてはゐない。

兎に角、以上の如く考へて來るならば、自然學と形而上學との聯關は、歴史的にも體系的にも、相當密接であることは明であつて、形而上學の個別的實有の論理に對して、自然學が重要な示唆を與へたと見ることは、謂れなきことではない。即ち、我々は先に、形而上學に於けるアリストテレス存在論の中心概念たるウシアの存在論的構造を追究して、形相と質料の二つの構成的原理を取り出し、その何れに、ウシアの個別的實有性の根據が横はるかを追究したのであるが、我々は、嚴密には、その何れにも歸することは困難であり、恐らく、その特異なる現實的綜合の上に、その根據を求むべきでないかを疑問としたのであるが、今や、我々は、自然學の如上の示唆に基いて、かやうな根據を、場所及び時間の範疇に求め得ないかを反省しようと思ふ。所で、場所及び時間は、アリストテレス範疇論に於ては、何處（ποῦ）何時（πότε）と云ふ名稱の下に、他の範疇と並列せしめられ、寧ろ極めて重要でない位置しか與へられてゐないことは周知の如くである。從つて、これを、ウシアの個別的實有性の基く根據として、アリストテレス存在論の樞軸に据えるには、多くの躊躇を感ぜしめるのであるが、しかし、既に述べたやうに、自然學に於て、こ

の兩概念の持つ意義を考察した後に於ては、一般存在論に於ても、その持つ存在論的意義を、擴充し深化して解釋する道が、甚だしくプリストテレスを曲解することなしに、開かれるのでないかと思はれる。

先に述べたやうに、プリストテレスの範疇は、これを主語的範疇と述語的範疇とに分つことが出來る。前者は、一般に世界内に於ける個別的實有の主體性を確立する範疇であり、後者は、實有そのものの世界的性格を確立する範疇である。扨て、感性的な實有が、世界環境に於て、自己を主體的に限定すると云ふことは、單に無限定な質料の形相的限定と云ふことだけでは充分ではない。現實に個別的實有が、個別的實有性を確立するには、その質料の形相的限定が、一定の具體的條件の下に生起しなければならない。つまり、一定の自己に固有な場所に於て、自己の場所的限定が行はれるのでなければならぬ。これによつて初めて、その實有は、一つの個物として、他の個物に對立し、又世界環境内に於て、自己を他から區別し、世界及び他の個物に對して、自己を對立せしめ、これによつて、自己の個別的實有性を確立することが出來るのである。尤も、右のやうに解釋された場所は、最早や、單に、個物の世界に於ける、或一定の場所的限定を示す「何處」の範疇と直に同一視すべきでないことは勿論であつて、寧ろ、範疇全般に互つて、それ等の更に根底に存する、秩序を異にした基礎原理と見るべきものと思ふ。從つて、右のやうな解釋を施すことは、稍行過ぎの感あるを免がれないが、既に述べたやうに、個別性の原理の根據に關するアポリアを根本的に解決するためには、自然學の示唆に基いて、以上の解釋に赴く體系的必然性があるものと思ふ。

尙又、個別的實有の主體的個別性を確立する原理としては、時間的原理を必要とすること勿論であるが、そして、このものが、同樣に「何時」の範疇の意義で盡くされるものでないことも明かなことであるが、これについては、可能態及び現實態の存在形態と密接な聯關を持つものであり、それ等の詳細な論究なしには、明確な解釋を施し得ないものであるから、茲では暫らく觸れることを避け、主として場所について考察すれば、場所は、基礎的存在論の根本的原理であるためには、單に「何處」を示す一述語的範疇に止まらず、その實有の個別的並に世界的性格を確立する場

所的限定の原理に迄高められねばならぬ。そしてかく解することが、アリストテレス存在論の含む内面的なアポリアを、體系的見地に於て、矛盾なきエウポリアへ轉ずる唯一の可能なる道であると思ふ。

しかし、右のやうに解釋し直された場所の原理は、最早や、「何處」の如く、他の範疇と肩を並べるべきではなく、それ等の更に根底に横はらねばならぬとすれば、場所の原理とウシアの範疇卽ち存在の個別的主語的範疇との關係のみでなく、それと述語的な範疇との存在論的聯關と云ふものを考へる必要があるであらう。何故なら、これによつて、「何處」が「場所」としてウシア以外の範疇に對しても、基礎的な關係を持つことが明にされるからである。

註(1) Phys. B 7. 198 a21-26.　(2) ibid. B 1. 192 b8.
(3) ibid. Γ 1. 200 b12-13　(4) ibid. B 1. 192 b20-23

一五

上來述べ來つたところを總括すれば次の如くなる。アリストテレス存在論の基礎概念たるウシアは、何よりも先づト・デ・ティを意味する。形相及び質料は、この現實的な個別的實有の構成的原理として把握せらるべきであつて、それ等が單獨に、實有の個別性を確立する根據と見做すことは困難である。寧ろ形相と質料とが、他の一定の原理に從つて、具體的な個物を構成すると考へなければならぬ。ところで、かやうな原理は、我々の解するところに從へば、自然學の全面的に示唆するところであり、殊に場所及び時間に關する所論が有力な手がゝりを與へ、そこに含まれて居る種々のアポリアとその解決の仕方が、形而上學に於ける前述のアポリアを解決する光を與へる。卽ち、ウシアの個別的・現實的實有性を確立する原理としては、場所及び時間を考慮すべきである。所で形而上學の一般存在論では、「何處」及「何時」の兩範疇が數へられて居るのみで、場所及び時間なる原理は明に說かれてゐない。それ故、若しかやうな原理を見出さうとするならば、「何處」及「何時」の範疇に於てのみではなく、ウシア並に他の範疇に於ても、

かやうな原理の潜在する所以を明にして、「何處」及「何時」の兩範疇を、基礎的な原理の位置に高めなければならぬ、かやうなことは、勿論、アリストテレスが明に試みて居る譯ではないが、彼のウシアの範疇に對する見解、否、範疇全般に對する見解、及び後に詳論するやうに、運動變化と關聯して、ウシアの現實性を確立する原理に關する見解に於て、潜在的に認められて居るものであり、體系的な見地からは、かやうな思惟動機に迄立入つて、これを明確ならしめなければならぬと考へる。即ち、概括的に云へば、アリストテレスの存在論は、個別的・現實的實有たるウシアの存在論的體驗に即して、一般存在論を確立しようとしたものであり、プラントンの質料とイデアの兩原理は、この個物の二つの構成的原理として取入れられ、それが現實的に個物を構成するに當つては、一方、場所的限定としての種々の存在論的原理、即ち、可能性と現實性とを必要としたのである。かく解することによつて、自然學に於ける場所及び時間のアポリアの解決も光を見得るばかりでなく、形而上學に於ける種々のアポリアにも光を投じ得ると考へるものであつて、ウシアの範疇とそれに纏ひつくアポリの解決については、既に我々が大體明にし得た所であるから、それ以外の範疇に關しても同樣に光を投じ得るか否かゞ我々の次の課題でなければならぬ。

我々は、先に、ウシアの範疇は、主語的範疇であり、感性的存在が、存在の主體として、自己を世界内に於ける個別的實有として限定する存在論的形式であると云つた。即ち、感性的存在が、世界環境に於て個別的主體的に存在する在り方である。所で、個別的實有が、かやうに世界内に於て、自己を個別的主體的に限定すると云ふことは、他方に於て、客觀的な世界に對して、自己を世界的に限定することを伴ふのであつて、世界との聯關を離れて、實有の主體的自己限定と云ふことは成立たない。ウシア以外の範疇は、即ち、この個別的實有の世界性を確立する存在論的形式であり、云はゞ實有の世界内に於ける對世界的な存在の仕方である。ウシアが、存在の個別的主體性確立の範疇ならば、その他の範疇は、ウシアの世界性を確立する範疇であるとも云へやう。

扨て、ウシア以外の範疇、即ち、我々が假に述語的範疇と名けるものについてアリストテレスは或時は、量(ποσόν)質(ποιόν)關係(πρός τι)何處(ποῦ)何時(πότε)狀態(κεῖσθαι)所有(ἔχειν)能働(ποιεῖν)受働(πάσχειν)の九つを、[1] 或時は、狀態・所有を省略した七つを、[2] 數へて居ることは周知の通りである。所で、これ等の範疇が、ウシアの範疇に對して如何なる關係を持つか、又相互にどう云ふ關聯に於て立つて居るか、如何にして導き出され、又その本質は何であるか、等の問題について具體的考察をすべき順序であるが、之等の問題については、一般的な考察と論究は既に詳細論じた所であるから、こゝでは、個々に亙つて具體的に論じて見度い。併しその前に、多少先に論じた處と重複を免れないが、一應總括的な見地を明にして置き度いと思ふ。

我々が、ウシアと他の範疇との對立を單に文法的・論理的關係に求めると云ふ考へに滿足せず、飽く迄存在論的な關係に求めやうとする。勿論、これによつて、範疇が、文法乃至論理と無關係であると云ふことを主張する意圖はない。すべて言語にしろ、その文法乃至論理的關係にしろ、終局に於て存在の論理に基くものである限り、存在論的原理と何等かのつながりを持つべきは當然であり、又アリストテレスが、これ等の範疇を導き出すに當つて、その文法との關係、論理的關係等を全然考慮しなかつたと考へることも妥當を缺くであらうが、只問題は、そこに支配して居る指導的な動機である。これを飽く迄存在論的であつたと見るのが、この論文の主要な著眼點である。勿論、ゾレンタノが、アリストテレスの原典に即して綿密に、範疇の分類を、アリストテレス自身の用ゐた語句によつて成し遂げやうとした如き努力に對して、充分の敬意を捧げるものであり、例へば、τὸ καθ' αὑτὸ τῆς κατηγορίας ὄν を οὐσία と συμβεβηκότα に、更に、後者は、πάθος と πρός τι に、πάθος は更に ἐν ταῖς ἕξεσι と πρὸς τέλεσι 及び τὰ ἐν τῇ ψυχῇ に分類するが如きであるが、[3] 此分類によつて、我々は成程、範疇のもつ或種の論理的關係、即ち、主辭に於ける賓辭の實存樣式が明確にされることは事實であるが、しかし、この事から、何故にアリストテレスの擧げたやうな範疇が正しくその通りに導き出されねばならなかつたか、何故に、他の種類の範疇が見出され得なかつたかの存在論的理由を明に理

解し難いと思はれる。かやうな論理的な關係から、この種の範疇が演繹されたのではない。只かやうな範疇が一旦打立てられた場合に、そこにこのやうな論理的關係が見出されると云ふに過ぎないのである。何故に分量や性質が、何故に能働や受働が、何故に「何處」や「何時」が、何故に關係や狀態や所有が正しく範疇として打立てられねばならないのであるかは更に深い存在論的な理由がなければならないのである。我々は、かやうな理由を、個別的・現實的實有が、世界環境内に於て、自己を他の同樣な個別的存在主體から區別し、これとの、又世界環境一般との動的聯關に於て、自己を存在論的に限定する現實的事態の中に求めようとし、これをウシアの主語的範疇に於て實證しようと努めたのであるが、次に我々は、ウシア以外の範疇に於ても、同樣のことが實證し得らるゝかを試みて見よう。（未完）

註 (1) Top. A 9. 103b 20–23; Cat. 4. 1b 25–27.
(2) Analyt. post. A 22. 83a 21–22; 83b 16–17.
(3) Brentano, op. cit. S. 177.

前號目次

アリストテレースに於ける知性の構造……文學士　安藤孝行
思辨論理の可能性に就いて（承前）……文學士　山本清幸
爐部屋への幻想（完）……伊禮正雄
—デカルトにおける體驗と理論—